



津軽野や小衣こぎん刺すかに揚ひばり  
 奥山源丘  
 姫芝の日の斑を踏みて春の音  
 岩井かりん  
 羨うらやまみな鳥の形よ雪解光  
 栗原利代子  
 鏑やぶ矢の的射る唸り奉射まつり祭まつり祭  
 大野今朝子  
 多満自慢嘉泉澤乃井土筆和  
 満田光生  
 ちやんまいろ佳い貌と言ふ我の癌  
 水谷亮一  
 チューリップ立つ月曜は戦士の日  
 岩上諒磨  
 きつねだな彼の世へつなぐ海のうへ  
 田村道子  
 枯あじさい固まりとして生きにけり  
 加藤律子  
 風光るパリ街角のダンサーよ  
 鈴木春子  
 太陽を擱んで壊る石鹼玉  
 倉科繁登  
 乳色に乳離れしては春の雲  
 森千恵子  
 餅焼くや此の世ひつくり返らざる  
 柿谷有史

吹越や木目の著き姥の神  
 宮岡光子

春のからだ心地良きこと物差しに  
 榎木幸子  
 山笑ふ音聞こえたり平泉  
 二木 暖  
 陶土揉む力待みて寒仕込  
 広枝千鶴子  
 白鳥を見に来て見られている心  
 石井紀美子  
 我もはや攫はれもせず春一番  
 太田 薫  
 囁ささやとふ光の粒の無尽蔵  
 島田葉月  
 黄梅の盛りは水の猛きかな  
 児玉君子  
 遊牧の民になりたし春の星  
 古田 了  
 春暁の國はりぼてのシャングリラ  
 三品吏紀  
 銀色の卵孵りて猫べんべろ柳りゅうと  
 松井 弓  
 雪解星母乳の香りするやうな  
 小林邦子  
 春の星瞬きはじむ慎爾なく  
 田中利政  
 歲月は我の宝やひなあられ  
 小林さなえ  
 春暁や鏑やぶを落しにひと歩き  
 原 保次郎  
 井月が禪洗ひし春の川  
 成瀬嘉一

巻頭寸言 三枝昂之著『佐佐木信綱と短歌百年』（角川書店）をじっくりと読んだ。読後の端的な感想は、自我も写生も特殊、狭いと感じさせられる。なぜなのかわかっている。ここが問題であるが、わからない。大海原を歩み続けた歌人。唱歌「夏は来ぬ」や軍歌「水師宮の会見」（庭に一本なつめの木云々）を作詞し、『校本万葉集』を編む。一首あげれば「ゆく秋の大和の国の薬師寺の塔の上なる一ひらの雲」。敗戦歌は「わが心くもらひ暗し海は山は昨日のままの海山なるを」（信綱）。

俳人对比するならば高浜虚子か。一句はさしずめ「遠山に日の当りたる枯野かな」。敗戦句は「秋蟬も泣き糞虫も泣くのみぞ」。どうもスケールが違う。短歌・俳句の詩形の違い？

春の音——姫芝の日の斑を踏む詩想の新しさ

姫芝の日の斑を踏みて春の音 奥山 源丘

昨年来、私は極めて地味な足元の草「姫芝」に注目している。整にも食い込んで枯草が火花をなすごとし。いわゆる雑草である。だれも見向きもしなかった。そこに春の音を聞いたのが新鮮だ。時代の空気を捉えるに敏。これは大成するのに必要な美質である。着眼にわずかテンポが遅れると類想感を

摩の「澤乃井」。つまみは土筆和だよ。生まれ故郷の会津の美酒「写楽」で鍛えた腕前が先生稼業を終えてからいよいよ本領発揮。さあさあ、いらっしやい。「岳」関東支部長にして酒豪。

ちやんまいる佳い貌と言ふ私の癒 水谷 亮一

「ちやんまいろ」は蔭の臺の方言。わが体内の癒もそんな貌をしているのか。「佳い」「悪い」は命の分水嶺。安心安心。

チューリップ立つ月曜は戦士の日 岩上 諒磨

気になる句である。「戦士の日」とは。戦役戦士ではなく、企業戦士か。月曜は週の始まり。路傍のチューリップが励ましてくれる。戦士よがんばれ、資本主義の日本国は君らの双肩にかかっている。どこかアニメ風の軽さもあり、本気半分揶揄が半分。私はアニメにくらい世代で、その原点に当たる漫画も読んだことがない。現代はまじめな表現がアニメーションになってしまふ軽さが怖ろしい。

今月の秀句

斃されし闇へ二月の雪霏霏と 栗原利代子

ロシアの反体制指導者アレクセイ・ナワリヌイがプリンにより斃された。まさに現代の暗黒だ。堂々たる問題提起の作として記憶したい。春を迎えるはずの二月が真冬の寒さを感じさせる。俳句の韻文性を巧みに散文の着眼で革新している。飄々たる作風に底力がついてきた。

生む。大胆に問題提起をしてほしい。源丘は俳句にも包容力があり、慕われる。句会メンバーが生き生きしている。

津軽野や小衣刺すかに揚ひばり 佐藤 映二

比喩が地貌の味わいを掬い上げている。懐かしい津軽の風土が揚雲雀の動きに見える。小衣に縫い針を刺す津軽の女衆の手さばきが伝わるのである。地貌詠が巧みな作者。

缺みな鳥の形よ雪解光 岩井かりん

日常、缺を使うことが多い。それが鳥の形をしている。嘴から流線形の体形まで鳥はスマート。用途が素早いことが要求されるだけに、春先の缺の出番に先立っての着眼が秀逸だ。

鏃矢の的射る唸り奉射祭 大野今朝子

一月の伏見稲荷が名高いが、ここは三月半ばの安曇野詠。総社穂高神社の早春に四方の陰気、邪気を払い陽気を迎え、豊穣を願う祭。通称「おびしゃ」。神楽殿の前に据えられた大きな的をおよそ十メートル離れたところから九人の神官が射る。「唸り」がいい。正月から春先まで各地に多い祭である。

多満自慢嘉泉澤乃井土筆和 満田 光生

呑助の酒自慢。福生の「多満自慢」、立川の「嘉泉」、奥多

きつねだな彼の世へつなぐ海のうへ 田村 道子

きつねだなは蜃気楼。名称が土俗的、地貌的で惹かれる。蜃気楼では只事に近い。表現はことばだと気づかされる。

枯れあじさい固まりとして生きにけり 加藤 律子

枯れたあじさいは目についても詩情を湧かすことは難しい。地味である。一年間紫紺から臙脂、そして漂白されたグレイの枯れあじさいまで根気よく嫌にならないで見てきた。人間の生存を連想させる。「固まりとして」がいい着眼である。

風光るパリ街角のダンサーよ 鈴木 春子

明るい。屈託がない。踊ってなにがしかの喜捨を当てに暮らしている。人生というものを求めない。その日暮らし。

太陽を掴んで壊る石鱈玉 倉科 繁登

すれすれの巧さ。ただごとではない。そこが非凡である。子供のストローから離れ、太陽の輝きを持った途端に割れて夢は消えてゆく。石鱈玉にとりそれが本懐か。

乳色に乳離れしては春の雲 森 千恵子

清少納言が讚えた春暁の「やうやう白くなり行く、やまぎはすこしあかりて、むらさきだちたる雲のほそくたなびきたる」（『枕草子』第一段）を踏まえたものか。「乳離れ」してゆくさまは「むらさきだちたる」まで。春の雲には赤ちゃんの初々しさがある。

餅焼くや此の世ひつくり返らさる 柿谷 有史

目が不自由な有史君には激しいドラマを想像する屈折した

気持があらう。臉の裏一色の世界で暮らす人の想念は健常者の世がひっくり返る幻想だつてあらう。正月の餅を焼きながら、そんなことはないんだという「諦念」を持った。幾分歳をとったかな。有史君から教えられることが多い。

地盤が繋ぐこの世とあの世―雪国の「姥の神」信仰に光を

吹越や木目の著き姥の神 宮岡 光子

峠を越えて吹き降ろす風花からさらには吹雪まで、雪国には各地に「吹越」伝説がある。木喰上人が残した姥の神であらうか。姥の神の正体もはっきりしない。北海道の江差の姥神社の姥神もあれば、三途の川の奪衣婆まで。

掲句も、雪国の村外れのお堂にでも置かれた姥の神。誰が残したとも知れないが、何がしかの信仰の対象になっている。

今月の秀句

山笑ふ音聞こえたり平泉 二木 暖

季語「山笑う」は本来、聴覚表現ではない。早春に薄霞がかかる、雪解氷がたつなど、春めいた気象現象が現れた視覚表現を擬人化したもの。それを承知で歴史の亡霊が立つ平泉の地の「音」を幻聴した。自然の山も藤原三代を始め義経一党の悲劇などを見つめて、ちまちました人間界を笑ったものか。若い暖君の求める世界が見えはじめ、面白い。

山村の住民のすれすれの生存が見えて惹かれる。

春のからだ心地良きこと物差しに 柗木 幸子

判断の際に、身体感覚の「心地良きこと」を基準にする。気持がいいことは私ばかりでなく、他の人にも幸せに違いはない。これはものを掴む明快な指針になる。逆に、気持が悪いことはマイナス。人も共感しない。生き方も同じ。論理や理屈ではなく、からだ感覚での判断がなるほどと思う。

陶土揉む力恃みて寒仕込 広枝千鶴子

作者は陶芸家。寒中から陶土の仕込みに入る。寒いなどと平凡な挨拶は拒否。張り切っている。読み手は活力を与えられる。春には展示会もあらう。

白鳥を見に来て見られる心 石井紀美子

白鳥から見られる。水上で水に映るわが姿を見つめて自省心が強い白鳥が岸の見物客を見ている。ちらっと眼が合ったものか。そのように白鳥を見た作者の批評意識は鋭い。

我もはや攫はれもせず春一番 太田 薫

「春一番」が風ばかりではない、「春一番に」と掛詞の面白さが込められていることが面白い。さまざまなスカウトにも会ったか。体重のことではない、貫禄の一句である。

囀とふ光の粒の無尽蔵 島田 葉月

囀りは光。いい発見だ。後から後から光が生まれる。春は囀りの季節であるが、春の本体は光なんだ。それも無尽蔵。

春の星瞬きはじむ慎爾なく 田中 利政

慎爾は齋藤慎爾。俳人で深夜叢書出版社主。二〇二三年三月二十八日、八十三歳で逝去。鋭いことば感覚の持ち主であった。詩人でもある利政には共鳴するところがあつたもの。追悼詠。

歳月は吾の宝やひなあられ 小林さなえ

究極は誰でもそうであるに違いない。その時々々は反発も共感もあつた。が、よく生きてきたと思う。激しさが過ぎて今は純真。眼前には「ひなあられ」。作者は画家でもある。

春暁や鏝を落しにひと歩き 原 保次郎

作者八十六歳。若い。歩いて鏝が落ちるとは地についた生き方が輝く。いい句である。俳人のお手本のような作に共感。

井月が禪洗ひし春の川 成瀬 嘉一

矢島恵門下の伊那の俳人。伊那はまた井上井月の放浪三十年の故地。禪を天竜川で洗ったこともあらう。道理で天竜はどこか臭う。あれは井月の仕業であつたか。

他に、雪嶺集、前山集、岳集からの推薦候補作を掲げる。

少女見て片足あげる春の駒 田中 純子

若布刈舟空の羽搏き操れる 川村 五子

寡黙とは心の寒さ深きこと 松本よし乃

トラクターの爪新しく事八日 塩原 英子

石鱗玉壊るる花になりそこね 岩上 諒磨

黄梅の盛りは水の猛きかな 児玉 君子

垣根を彩る。雪解氷がとうとうと溢れる。地味な句であるが、視点が低いのがいい。珍しい発見があらう。

遊牧の民になりたし春の星 古田 了

根っからのロマンチスト。「春の星」との純情な置き方にハッとした。中村哲さんの心の深部にも遊牧民の自由への憧れがあつたのではないか。戦前の満州浪漫に生きた男たちにも。シルクロードに憧れる浪漫は、狭い日本では満たされなない。連句に堪能な岐阜の作者の本音か。

春暁の國はりぼてのシャングリラ 三品 吏紀

「シャングリラ」はイギリスのヒルトンの小説『失われた地平線』に描かれた架空の楽園、理想郷。「はりぼて」は張り子で作った中が空っぽの芝居の小道具。北海道在住の吏紀君が気持のいい春暁にふと幻想を抱いた「國」。今の日本ではない。歴史上の「日本」とりわけ戦後あたりか。不思議な作。

銀色の卵孵りて猫柳と 松井 司

川辺の猫柳はさしずめ銀色の卵。賢治の方言「べんべろ」からの着想であらう。軽い幻想が心地よい。

雪解星母乳の香りするやうな 小林 邦子

雪解時の清冽な星を「母乳の香」がするとはからだ感覚を働かせた表現に共感する。女性の体験に基づく発想だ。